



大岩 千穂 Chiho Oiwa / ソプラノ

国立音楽大学卒業。ヴィオッティ音楽院を首席卒業。イタリア、フラヴィアーノ・ラポー国際声楽コンクール第1位。ヴェルディの声国際コンクール入賞。第1回国際オペラコンクールin Shizuoka最高位および三浦環賞受賞のほか数々の国際コンクールに入賞。

「椿姫」のヴィオレッタ役でイタリアデビュー。1998年サンタ・マルガレーテン・オペラ・フェスティバルで「カルメン」のミカエラ役で大成功を収める。99年ハンガリー国立歌劇場の「ラ・ボエーム」ミミ、アスコリピチエーノ歌劇場およびフェニーチェ歌劇場において「蝶々夫人」のタイトルロールで世界の注目を集める。フロリダ・パームビーチ・オペラでの「蝶々夫人」でアメリカデビュー。ソリストとしてチェコフィルハーモニー管弦楽団、ポリショイ劇場管弦楽団と共演。国内では新国立劇場、東京二期会、藤原歌劇団のオペラ公演のほか、兵庫県立芸術文化センター「蝶々夫人」、びわ湖ホール「サロメ」、愛知県文化振興事業団「ナブッコ」等で主役として活躍。

2012年6月には「スウェーデン建国記念の集い（在日スウェーデン大使館）」に招かれ、国王、王妃の前で日本とスウェーデンの国家を斉唱。10月に大阪いずみホール「オペラ・ガラ・コンサート」、11月には紀尾井ホールで「大岩千穂 L'OPERAコンサート《マダム・バタフライ ハイライト版》」に出演大好評を博した。本年11月にも紀尾井ホールにて《トスカ ハイライト版》に出演の予定。

日本が世界に誇る真のリリコ・ピエーナとして活躍している。

これまで、「万人の第九」「題名のない音楽会」「深夜の音楽会」などテレビ番組への出演も多い。二期会会員。日本声楽アカデミー会員。

第8回

大岩千穂 はなみずきコンサート

2013年6月13日（木）

学士会館

主催

大岩千穂後援会

佐藤 正浩 Masahiro Sato / ピアノ

東京藝術大学声楽科卒業。ジュリアード音楽院ピアノ伴奏科修士課程修了。ジュリアード修了後、サンフランシスコ・オペラのオーディションに合格、専属ピアニストとして研鑽を積む。指揮者ケント・ナガノの招きでリヨン国立歌劇場の首席コレペティートルとなり活躍する。その後もゲルギエフ、チョン・ミョンフン等のアシスタントとしてシャトレ座、ラヴェンナ音楽祭、ウィーン芸術週間などで活躍。イギリス・ダーティントン音楽祭で「イドメネオ」を指揮しデビュー、翌年も「ナクソス島のアリアドネ」の指揮者として招かれ、また新国立劇場「オルフェオとエウリディーチェ」で日本デビューを果たし脚光を浴びる。近年では日生劇場「カルメン」、新国立劇場「トスカ」、藤原歌劇団「愛の妙薬」、東京オペラ・プロデュース「放蕩者のなりゆき」、いずみホール「ランスへの旅」等を指揮し、「音楽現代」紙上で「私が注目する指揮者たち」の一人に挙げられる。和光市でヴェルディ・プロジェクト「オテッロ」「仮面舞踏会」「ナブッコ」を上演し三菱UFJ信託音楽賞を受賞。

ピアニストとしてはこれまでに大岩千穂、浜田理恵、小山由美、坂本朱、重松みか、佐野成宏、堀内康雄等と共演、高い信頼、評価を得ている。

プログラム

～バロック時代のオペラ作品から～

『ポントスの王女アルシルダ』(ヴィヴァルディ作曲)より

♪私はジャスミンの花



『セルセ』(ヘンデル作曲)より

♪ オンブラ・マイ・フ



『ジュリウス・シーザー』(ヘンデル作曲)より

♪この胸に息あるかぎり

～イタリアオペラ作曲家の作品から～

『カヴァレリア・ルスティカーナ』の間奏曲(マスカーニ作曲)

♪アヴェ・マリア



『ノルマ』(ベッリーニ作曲)より

♪清らかな女神よ



『つばめ』(プッチーニ作曲)より

♪ドレッタの美しい夢



『トスカ』(プッチーニ作曲)より

♪歌に生き 愛に生き

～日本の歌～

♪椰子の実 (島崎藤村作詩 大中寅二作曲)

♪初恋(石川啄木作詩 越谷辰之助作曲)

♪月の沙漠(加藤まさを作詞 佐々木すぐる作曲)

オペレッタ『メリー・ウィドウ』(レハール作曲)より

「唇は語らずとも」

(ダニロ)

高なる調べに

いつか

心のなやみも

とけて

言わねど知る

恋心

想う人こそ

君よと

(ハンナ)

調べにつれ

ときめく胸

この思いを

告げよと

波打つ

口はとじても

心にはかよう

愛の甘き

ささやき

(ダニロ, ハンナ)

言わねど知る

恋心

想う人こそ

君よと

曲目について1. ヴィヴァルディ作曲オペラ『ポントスの王女アルシルダ』から「私はジャスミンの花」

ヴィヴァルディは主に器楽曲（特にヴァイオリン音楽）の作曲家として有名ですがオペラでも多くの作品を残しています。彼はヘンデルと同時代のいわゆるバロック音楽の作曲家で当時の様式や技巧を巧妙に取り込み、史実や英雄物語を主題とする（時には外国を舞台とした）オペラを作曲していますがこのオペラもその一つです。

ギリキア王国（現在のトルコ南部の地中海地方に昔存在した王国）の老女王アンティパトゥラ（未亡人）は双子の兄（タメーゼ）と妹（リゼア）が成人となるまで彼らの叔父と共に王国を統治していた。タメーゼは若きリュディア王パルザーネ（妹の秘密の恋人）と共に反乱鎮圧に国境に向かうが途中ポントス（黒海南部沿岸にあった王国、後にローマの属州）の国王の客人として滞在しているうちに二人とも同王国の王女アルシルダに恋をしてしまい二人の間の友情にひびが入る。アルシルダはタメーゼを選ぶが、それを恨んだパルザーネは復讐を誓う。帰国の途中タメーゼを乗せた船が難破してしまう。ギリキア王国は男子相続を厳格に行っており、このことを知った老女王は双子の娘リゼアが死んだことにしてリゼアが今後兄タメーゼに扮して生きるよう要求する。やがて老女王も死にリゼアが（タメーゼに成り代わったまま）王位を継承した。一方、タメーゼ（実はリゼアの成り代わり）が助かって帰国したことを聞いたアルシルダは結婚の約束を信じてギリキア王国に旅立つ。そして婚約者に一刻も早く婚礼の約束を果たしてほしいと詰め寄るが煮え切らない答えに深く傷つく。一人になったリゼアは最初から計画を知っている腹心の友ミリンダに絶望的な思いを吐露する。アルシルダに対する共感と自分の正体がばれることの恐怖、まだ愛しているパルザーネの裏切りにリゼアの心は千々に乱れる。そこに難破して死んだと思っていた本物のタメーゼが帰国、妹が王位を篡奪したと思い込んでしまう。タメーゼは誰にも帰国を知らせず庭師として王宮に入り込み、恋に臆病なミリンダが彼に恋心を寄せる。こうして物語はますますややこしくなりますが、最後はハッピー・エンドとなって幕を下ろします。このアリアはオペラ第一幕で恋に臆病なミリンダが自分を“せせらぎのほとりで咲くジャスミンの花”に、そして庭師に成りすましたタメーゼを“蜂”になぞらえて歌うアリアです。

私はあのジャスミンの花

せせらぎのほとりで

若草のなかに隠れて

ひっそり咲いている

せせらぎのほとりの
若草のなかのジャスミン

みずみずしい若草とだけよ
こわい思いをしないで
おしゃべりする喜びは
真っ白な花の上を
蜂が飛び去ってしまうから

2. ヘンデル作曲オペラ『セルセ』より「オンブラ・マイ・フ」

ヘンデルのオペラが大人気になっている。彼のオペラはよく澄んだ美しい曲が多く、心が洗われるような清々しさを感じる。特に『セルセ』の冒頭で歌われるこのアリア「オンブラ・マイ・フ」(「ヘンデルのラルゴ」)は世界中で親しまれている。セルセとはペルシャ王クセルクス一世(在位紀元前485-465)のこと。彼の在位中は半世紀にわたってギリシャとペルシャが戦った(ペルシャ戦争)時代にあたる。クセルクスは大軍を率いてギリシャに攻め込み一時はアテナイを占領するにいたるが海軍力に優れたギリシャに狭い湾内戦に持ち込まれて大敗を喫してしまう。クセルクスは最後には宮廷内の陰謀で殺害される。このオペラの物語はセルセ王(クセルクス)が弟の恋人であるロミルダを横取りしようとして弟と張り合い、そこに王の婚約者や王の弟を愛するロミルダの妹などが絡んで展開する。結局、王はもとの婚約者と王弟もロミルダと結婚しハッピー・エンドとなる。この曲はクセルクスが一本のプラタナスの木に見惚れて黄金で飾り付け、専属の兵士を見張りにまでつけたという謂れにもとづくものである。今日ではオペラ「セルセ」はほとんど上演されないが、この伸びやかで明るい旋律を持つ曲はコンサートでよく演奏され愛されている。もともとはカストラート(少年の声を維持するために変声期前に去勢した男性歌手)により歌われたが現在はカウンター・テノールやソプラノにより歌われる。我が国では1980年代ニッカウキスキーのCMとしてキャスリーン・バトルにより歌われセンセーションを巻き起こした。

こんな木陰は今まで決してなかった
緑の木陰
親しく、そして愛らしい、
よりやさしい木陰は

3.ヘンデル作曲『エジプトのジュリアス・シーザー』(単に『ジュリアス・シーザー』または『ジュリオ・チェザーレ』とも)より「この胸に息ある限り」

次はヘンデルのオペラの中で世界の歌劇場での上演回数が最も多い大作です。ローマの将

軍ジュリアス・シーザーは政敵ポンペウスを追ってエジプトのアレキサンドリアに進軍。ポンペウスの妻（コルネア）と息子（セスト）がシーザーのもとに来て和平を申し出て、彼はそれを受け入れる。そこにエジプトの將軍アキッラが国王トロメオ（プトレマイオス13世：クレオパトラの弟で彼女の夫。彼女と共にエジプトの共同統治者）の貢物といって皿にのせたポンペウスの首を差し出す。同胞の変わり果てた姿を見てシーザーは怒りと嫌悪をつのらせる。クレオパトラは弟の国王の性格や統治能力に限界を感じ自ら単独統治者になろうと決意する。彼女はシーザーを自らの魅力で籠絡して彼の助力を得ようとする。一方、シーザーに支持されていないと知った国王は軍勢を向けてローマ兵たちの追放を図る。夫の殺害を恨むポンペウスの未亡人は彼女に言い寄る国王やアキッラを振り切り息子と共にシーザーの側につく。シーザーは戦いに出動しローマとエジプト両軍勢の激しい戦いとなる。シーザーが退却する途中海に飛び込んだという報告が持たされる。クレオパトラの兵たちもトロメオの軍勢に敗れ、彼女が捕えられて連行されていた後に海を泳ぎ生還したシーザーが現れる。クレオパトラの部屋。兵士たちに囲まれたクレオパトラは絶望のうちに死を覚悟してこのアリア「この胸に息ある限り」を歌う。その後シーザーが彼女を助けに現れ、最後にトロメオはポンペウスの未亡人と息子に仇を打たれて倒れる。クレオパトラは王冠をシーザーに渡すが、彼はそれを断り彼女こそエジプトの女王であると言い彼女に返す。

この胸に息のある限り
これほど過酷で非情な運命に
私は涙を流し続けることでしょう
でも死んだ後 夜も昼も
あの暴君につきまとい
怨霊を送りつけ
脅かしてやりましょう

4. マスカーニ作曲『アヴェマリア』

マスカーニはいわゆるヴェリズモ・オペラの代表的作曲家です。ヴェリズモ・オペラは偉大なヴェルディ時代の後、新しい境地を開拓しようとの試みのなかから同時代の市井の人々の日常生活や残酷な暴力などの描写を多用すること、音楽的には直接的な感情表現に重きを置き、重厚なオーケストレーションを駆使することなどを特徴として生まれたオペラです。その代表的作品はマスカーニのオペラ「カヴァレリア・ルスティカーナ」で、シチリア島でのドロドロした不倫の話を題としたオペラです。ストーリーの詳細は割愛しますが、クライマックスに至る直前、教会での礼拝のシーンで演奏される「間奏曲」は世界で最も美しい間奏曲と言われ単独でもよく演奏される名曲です。そしてそのメロディに歌詞を付けたものがこの「アヴェ・マリア」です。他の多くの「アヴェ・マリア」のようにラテン語の典礼文の文句をそのまま用いたものではありません。

アヴェ・マリア 聖母様
御身に哀願せんとするこの不幸な足を支え給え
ひどい苦しみの道のにあっても
信仰を、希望を心の中に呼び覚まし給え

おお、慈悲深きお方、大いなる苦しみを受けし御身
ご覧あれ、ああ我が苦しみをご覧あれ
限りなき涙を流し 残酷な苦悶の中にある者を
おお見捨て給うな

アヴェ・マリア、悲しみの苦悩の中に
我を留め給うな、おお我が母 お慈悲をあたえ給え
おお我が母 お慈悲をあたえたまえ 悲しみの苦悩の中に
我を留め給うな、我を留め給うな

5. ベッリーニ作曲オペラ「清らかな女神よ」

「ノルマ」は夭折の天才的作曲家ベッリーニによるベルカント・オペラの最大の傑作。このオペラは純粋な旋律美と気品にあふれケルト人たちの残酷な悲劇が崇高で格調高いドラマとして演奏されます。人間の声を作り出す様式美が素晴らしく、特にその中で歌われる「清らかな女神よ」の高貴でしなやかな美しさは特筆に値します。ノルマを歌うプリマドンナはベルカント唱法の名手として声の魅力、技巧に加え演技でも風格が要求され難度の高い作品です。

物語の舞台はローマの属領に組み込まれつつあった紀元前50年頃（有名なシーザーの「ガリア戦記」は紀元前58年から51年間の記述です）のガリア地方（現在のフランスからスイスにかけての地方）。この地ではケルト人たちが緩やかな部族連合により祭政一致の社会を維持しながらローマの支配下に入っていたが、今やローマ支配に対する彼らの不満とローマに対する反攻の気運が高まりつつあった。ノルマはこの地域の族長でドゥルイド教（土着の多神教）の大神官の娘です。ドゥルイド教の最高の女祭司として戦争と平和などの「まつりごと」は彼女が司る祭儀で下す宣託により決定される。今、森の中の聖域の中心にそびえる老木から寄り木を刈り取る祭儀が進行している。ノルマは秘密を胸に秘めこの祭儀を行っている。巫女として厳格な純潔を要求される彼女は密かに敵であるローマ軍の將軍（地方総督）ポリオーネと深い仲になり2人の子供をもうけている。しかし彼の方はもはやノルマへの愛はさめ若い巫女アダルジーザに心を移している。集まった人々の前に姿を見せたノルマは、血気にはやる彼らを鎮めて祈りを捧げながら、恋人へのやみがたい愛と、彼女が仕える神と同胞への忠誠とのジレンマに悩み、中天に輝く月（清らかな女神）に向かいこのアリアを歌います。

清らかな女神よ、この聖なる老木を
銀色に輝かせたもう美しい面を
雲ひとつなく陰ひとつなく
われらに向けさせたまえ
激した者どもの心を和らげたまえ
天上において栄えさせられるがごとき
その平和をこの地にも広めたまえ

ああ、いとしい人よ、帰って来て
初めの頃の真心こもった愛が通えば
世界全体を敵としても
私があなたの楯になろうものを
ああ いとしい人よ、かえって来て
澄み渡った光のもとにあれば
あなたの胸の中に私は生命をも
祖国をも天国をも見出そうものを

6. プッチーニ作曲オペラ『つばめ』より「ドレッタの美しい夢」

プッチーニはウィーンから「陽気で感傷的な」オペレッタの作曲を依頼され、作曲を始めますがうまくオペレッタを仕上げられず中途半端なオペラになってしまいました。この『つばめ』はどことなくヴェルディの「椿姫」に似ていますが、その甘美でデカダンスのこもった旋律はプッチーニそのものです。

舞台はパリトリヴィエラ。銀行家ランバルトをパトロンにしているマグダはサロンでの宴の真最中。詩人のプルニエが一人まじめに詩と恋愛について語り始めるので、マグダは助け船を出して彼に歌わせる。「ドレッタの夢」を歌いだした詩人はうまく最後まで歌えず、マグダがそれを引き取って「ドレッタの美しい夢」を歌い終える。みんながマグダを褒めたたえ、ランバルドは美しい真珠の首飾りを彼女に贈る。彼女は「お金はお金以外の何物でもない、それよりも昔出会った若者が忘れられないわ」と話す。プルニエがみんなの手相を診てマグダには「貴女はツバメのように海をわたり夢と恋の国に行くでしょう。でも必ずもとの国に帰ってきます」と告げる。小間使いのリゼットが片づけをしているとプルニエが入ってきて彼女を口説き、マグダのドレスを着せて出て行く。誰もいなくなるとマグダはリゼットのドレスを着て出て行く。マグダはルッジェロという青年と出会い意気投合し、パリを離れてリヴィエラの別荘で二人だけの生活をするが、ルッジェロは生活が苦しくなり父に無心の手紙を書き、母にはマグダとの結婚の許しを求める手紙を書く。母からの結婚の許しが届くが、彼女はルッジェロにすべてを語り「今が別れ時」と言ってパリの享楽の生活に戻っていく。

ドレッタの美しい夢を
想像できた人は誰もいなかったのか
そのミステリーはその後一体どうなったのだろう
ああ、ある日一人の学生から
彼女は口づけを受けた
その口づけによって彼女は目覚めた
激情が彼女に訪れた
気が狂うほどの恋だった

気が狂うほどの陶酔だった
これほどに熱い口づけの繊細な肌触りを
一体誰が言葉で
言い表すことができるだろうか

ああ 私の夢
ああ 私の命
もしも最後に
幸福がやって来るのなら
富は必要ありません
おお このような恋ができるのは
素晴らしい夢です

7. プッチーニ作曲『トスカ』より「歌に生き、愛に生き」

「トスカ」は世界の主要歌劇場で最も上演回数が多く作品としても完成度の高いオペラです。このオペラの舞台はフランス革命後の全欧州を巻き込んだナポレオン戦争当時（1800年6月17日から翌日未明）のローマです。1789年に勃発したフランス革命は共和政の理念をヨーロッパに拡げ各君主国は対仏軍事同盟を結びフランスを封じこめようとしていました。イタリアでは長い間外国の支配下にある王国や教皇国家が分立し、人々は圧政に苦しんできました。そのためイタリアの知識階級の多くの人たちは共和政の理念を受け入れフランス軍を自らの解放軍として歓迎しました。フランス軍の侵攻によりローマでは教皇国家が崩壊し共和国が樹立されましたが、その後ナポリ王国軍がローマに進出してこの共和国を打倒しました。ナポリ王国の王妃マリア・カロリーネは治安維持のため凄腕のスカルピア男爵をローマの警視総監に任命し共和主義者を徹底的に追及し恐怖政治を行う。歌姫トスカは自由主義思想を持つ貴族で画家のカバラドッシと愛し合っています。彼が聖母マリアの絵を制作している教会に倒壊したローマ共和国の元領事アンジェロッティが脱獄してきます。カバラドッシは彼を自らの別荘に置いますが捕えられて激しい拷問を受けます。トスカは彼を助けようとスカルピアの呼び出しに応じます。ここで彼女に対する情欲を露わにしたスカルピアは卑劣にも隣室で行われている恋人の悲鳴を彼女に聞かせて錯乱した彼女に彼の釈放と引き換えに自分に身を任せるよう迫ります。彼女は絶望に打ちひしがれ、その要求を受け入れることによりカバラドッシに対する見せかけの銃殺刑の執行と二人の国外への通行許可を得る。トスカは彼女を抱こうと近づいたスカルピアを卓上にあった果物ナイフで刺殺します。「歌に生き愛に生き」はカバラドッシに不条理な要求を突き付けられ絶望の極みに立たされたトスカが切々と歌うこのオペラ中最大の聞かせどころとなるアリアです。

歌に生き愛に生きてきました
生ある人を傷つけたこともなく

不幸な人を見れば
そっとわからないように助けてあげました
絶えず誠の信仰をもって
この私の祈りを聖なる御像にあげてきました
絶えず誠の信仰をもって
祭壇ごとにお花を捧げてきました
この苦難の時になぜ
なぜ主よ、なぜ
私にこんな報いをなさるのですか
宝石類を聖母様の
マントにも捧げましたし
歌を天の星に
ひときわ美しく煌めく星にも捧げもしました
この苦難の時になぜ
なぜ主よ
なぜ私にこんな報いをなさるのですか

8. 日本歌曲「椰子の実」(作詩 島崎藤村 作曲 大中寅二)

- 一 名も知らぬ遠き島より
ながれ寄る 椰子の実一つ
故郷の岸を 離れて
汝はそも 波に幾月

- 二 旧の木は生いや茂れる
枝はなお 影をやなせる
われもまた 渚を枕
孤り身の 浮寝の旅ぞ

- 三 実をとりて胸にあつれば
新たなり 流離の憂い
海の日 沈むを見れば
激り落つ 異郷の涙
思いやる 八重の汐じお
いずれの日にか 国に帰らん

9. 日本歌曲 「初恋」 (詩 石川啄木 作曲 越谷達之助)

砂山の砂に
砂に腹這い
初恋のいたみを
遠くおもい出ずる日
初恋のいたみを
遠く遠く
ああ ああ
おもい出ずる日

10. 日本歌曲 「月の沙漠」(作詞 加藤まさを 作曲 佐々木すぐる)

- 一 月の沙漠を はるばると
旅のらくだが 行きました
金と銀とのくら置いて
二つ並んでいきました
- 二 金のくらは 銀のかめ
銀のくらは 金のかめ
二つのかめは それぞれに
ひもで結んでありました
- 三 さきのくらは王子さま
あとのくらは お姫様
乗った二人は おそろいの
白い上着を 着てました
- 四 ひろい沙漠を一筋に
二人はどこへいくのでしょうか
おぼろにけふる 月の夜を
対のらくだは とぼとぼと
砂丘を超えて 行きました
だまってこえて行きました



(アンコール) 昨年はお客様で長く声楽を学んでおられる山本治男さんが特別参加して大岩さんと一緒にレハール作曲オペレッタ「メリー・ウイドウ」よりメリーウイドウ・ワルツを歌っていただき会場の皆さんに唱和していただきました。これは皆さんに大変好評で今年も是非という声に応じて同じ曲をもう一度演奏することを山本さんにお引き受けいただきました。

今年はさらにお客様としてご参加いただくソプラノ歌手の金見美佳さんに合唱指導をしていただきます。

レハール作曲 オペレッタ「メリー・ウイドウ」

ここは東欧の架空の小国ポンテヴェドロ公国の在パリ大使館の広間。いままさに同公国の国王の誕生祝賀パーティが始まろうとしています。今日のパーティのホスト役ゼータ大使はこのおめでたい日に密かな悩みを抱えています。ポンテヴェドロ公国の全財産を支配するといわれた大金持ちで銀行家の故グラヴァリ氏の若い未亡人（ハンナ・グラヴァリ）がパリに居を移したため、彼女の美貌と財産を手にいれようと、パリの伊達男どもが彼女を狙っているのです。大使の悩みは、彼女がフランス男と結婚したら公国は破産してしまうため、「絶対に彼女を守れ」という厳命を本国から受けています。この大使館には近衛騎兵中尉ダニロ・ダニロヴィッチ伯爵が勤務しています。大使はこの美男の騎兵中尉を使ってハンナをフランス男達の毒牙から守ろうと考えていますが、肝心の彼は毎晩酒びたりでマキシムの踊り子達にうつつを抜かしています。

かつてハンナとダニロの間にはちょっとしたいきさつがありました。故国にいたころ彼らは恋人同士でしたが、貴族であるダニロのおじさんが平民の娘ハンナとの結婚に反対したため結婚できず、傷心のダニロはパリに、そしてハンナは富豪で年寄りのグラヴァリ氏と結婚してしまっただけです。その後間もなく夫と死別した彼女は巨額の財産を相続して今やメリー・ウイドウと呼ばれています。ハンナは身内の反対を乗り越えなかったダニロの優柔不断さに腹を立て、ダニロもすぐに大富豪と結婚してしまっただけハンナの不実を恨みました。またダニロとしては大金持ちとなったハンナに結婚を申込むことはお金目当てのようで彼の誇りが許しません。そんないきさつのある二人は心の中では今もお互いに惹かれあっているのですが、お互いに張り合いいろいろな恋の鞘当てが展開します。

ハンナはみんなの前で「自分が結婚した場合、遺言により全財産を失うことになっている」と明かし他の男たちに肩透かしを食らわせます。これを聞いたダニロは大喜びで今や心の底からハンナに“**Ich lebe dich!**”と言えるのでした。二人の心を近づけたのはこの甘美で夢のような二重唱「唇は語らずとも」。ダニロとハンナは心をときめかしながらお互いの手をとり、「メリー・ウイドウ・ワルツ」として知られるワルツの調べに乗りこの曲を歌います。オペレッタの「銀の時代」を代表するフランツ・レハールの名曲です。

ところでその後、彼女は「その遺言によれば私は全ての財産を失いますが、その財産を引き継ぐのは私の夫となる人です」とみんなに宣言しオペレッタ「メリー・ウイドウ」は大団円を迎えます。